



看護師の聴診にあわせ、男児を両手で優しく包む母親（9月、千葉県の東京女子医大八千代医療センターで）

「えらいね、良い子だね」
9月下旬、千葉県の東京女子医大八千代医療センターのNICU（新生児集中治療室）。担当看護師が生後3週間の男児の胸に聴診器をあてる間、母親（38）は、優しく声をかけながら、両手で男児の体を包んだ。続いて、おむつを交換し、素肌の上に抱っこした。

そばにはもう一人、看護

師の小嶋久子さん（40）がいて、聴診から抱っこまで、男児の表情やしぐさを観察し、メモをとっていた。

一人だ。

観察の狙いは、「痛い」「気持ちいい」など言葉で訴えられない赤ちゃんの気持ちをくみ取ることだ。心

表情観察 気持ちを「代弁」

「えらいね、良い子だね」

9月下旬、千葉県の東京

女子医大八千代医療センタ

ーのNICU（新生児集中

治療室）。担当看護師が生

後3週間の男児の胸に聴診

器をあてる間、母親（38）は、

優しく声をかけながら、両

手で男児の体を包んだ。続

いて、おむつを交換し、素

肌の上に抱っこした。

そばにはもう一人、看護

師の小嶋久子さん（40）がい

て、聴診から抱っこまで、

男児の表情やしぐさを観察

し、メモをとっていた。

ると、重い慢性肺疾患など早産児の合併症を減らしたり、発達を促したりするという国内外の報告がある。

小嶋さんは「観察の力を磨き、早産児の代弁者として、一人ひとりの成長を支援していきたい」と意欲的だ。

このプログラムが国内に導入された背景には、新生児医療の進歩がある。厚生労働省の人口動態統計では、生後28日未満に死亡した新生児の割合（新生児死亡率）は、20年には100人あたり0・8人で、50年前の10分の1になった。

1970年代から新生児

医療に携わり、NIDCAP

の普及に尽力してきた東

京女子医大名誉教授の仁志

田博司さんは、「かつての

NICUは赤ちゃんの救命

で精いっぱいだったが、20

年ほど前から、心身の発達

を促す取り組みにも目を向

けられるようになつた。家

族と共に、赤ちゃんの心に

寄り添うNIDCAPの取

り組みを広めていきたい」と話している。

「えらいね、良い子だね」
9月下旬、千葉県の東京女子医大八千代医療センターで、聴診から抱っこまで、男児の表情やしぐさを観察し、メモをとっていた。

「気持ちいい」など言葉で訴えられない赤ちゃんの気持ちをくみ取ることだ。心

」

この日の観察で、小嶋さ

んは、おむつ替えの様子を

「手足を動かし、呼吸を止

めがちで、肌も赤くなりま

した。でも、口をもぐもぐ

して自らを落ち着かせようとすると落ち着くかもしれま

せん」と指摘。「家族や看護

師の手で体を包みこんだ

り、おしゃぶりを与えるとすると落ち着くかもしれま

せん」と分析した。

母親は、「子どものため

に何ができるか、具体的なアドバイスがあるので、少し不安が和らいでいます」と話す。

NIDCAPを取り入れ

る。機械の音がうるさくないか、照明がまぶしくないかなど環境も確かめる。

毎回の観察は、リポートにまとめた上で、看護師や家族に、赤ちゃんのストレスを減らすケアにつながるポイントを伝える。

この日の観察で、小嶋さんは、おむつ替えの様子を

「手足を動かし、呼吸を止

めがちで、肌も赤くなりま

した。でも、口をもぐもぐ

して自らを落ち着かせようとすると落ち着くかもしれま

せん」と指摘。「家族や看護

師の手で体を包みこんだ

り、おしゃぶりを与えると

すると落ち着くかもしれま

せん」と分析した。

母親は、「子どものため

に何ができるか、具体的なアドバイスがあるので、少

し不安が和らいでいま

す」と話す。

ご意見・情報を [〒100-8055 読売新聞東京本社医療部 FAX03\(3217\)1960](http://100-8055) iryou@yomiuri.comへ